

能登ボランティア活動に参加して 大西清見

連盟組織部「支援の輪」の活動として石川県珠洲市地震災害支援の活動に参加しました。2024年1月1日に発生し、石川県・富山県の両県を中心に大きな被害をもたらした能登半島地震（M7.6、最大震度7）。半島北岸沖から富山湾に分布する海域活断層群が連動し、沿岸域の海岸を最大5m越も隆起させました。テレビ、新聞で報道される地震の被害は想像以上のもので、その実態や被害状況も知りたくて支援活動の機会を長らく待っていました。その後1年8カ月後に大阪労山組織部で能登ボランティア活動が計画され、総勢10名で能登半島珠洲市に行くことが出来ました。今回の支援活動の報告は、リーダーの下窪さんがまとめられたので、私は簡潔にメモ的に書いてみることにしました。

8月29日（金）21時、会員10名が大阪駅前に集合、自家用車2台に分乗して石川県珠洲市へ。31日（土）午前5時、走行8時間で珠洲市の道の駅に到着。集合時間（9時）まで時間があるので珠洲市東部の海岸付近（鵜飼漁港）を散策することに。鵜飼港付近は地震に加え、最大約4mの津波を受けて岸壁や家屋が破壊されるなど、甚大な被害が広がっていました。能登半島地震は半島海岸西部は大規模な隆起、東部は沈降で、鵜飼港付近は道路沿いの電柱はまだ傾いたまま（写真左）、大半の家屋は崩壊となり今は更地になっていました。周辺の地形は沈降してマンホール蓋のみが残されている箇所もありました（写真右）。写真右からも1m以上も地形の沈下、家屋は新築の一軒家以外は更地となっていることが分かります。珠洲市東部は地震に津波の被害が大きかったようで、その様子を鵜飼漁港で出会った漁師さん（26歳）から知ることができました。珠洲だけで100隻以上の漁船が沈没、転覆、この青年の漁師さんの漁船は陸地に取り上げ、それをクレーンでおろして無事に使用しているとか。これから1年半ぶりに親子で漁に出るそうです。新しい珠洲の漁師さんの希望が伝わってきました。



30日9時～11時。13時～14時30分、珠洲市ボランティアセンターの指示に従って市役所北部の飯田町の民家の片づけに。作業のメンバーは兵庫県丹波から来られている8名の方と、家の中の大量の家具、雑貨などを軽トラで廃材置き場まで運ぶ作業でした。大阪労山組は軽トラ5台でペアを組み、猛暑のなか汗だくながら時間内に作業を終えることができました。ボランティアセンターには、この日も県内外から大勢の方が来られていまし

たが、珠洲市のボランティア活動として終盤のようです。この日の泊りは能登町の漁火ユースホテル、九十九湾に面した静かな宿で大阪労山で貸し切りでした。夜の集いでは参加者が自己紹介をしながら、それぞれの会のことや山への想いを語りあいました。組織部の「百名山の輪」や海外登山の夢なども出し合い、これからもこの日の参加者の活躍が続いていくようです。

31日（日）、この日の予定は別所岳登山経由の帰阪でしたが、別所岳をやめて能登半島西岸の被災状況を視察することを提案。まず向かったのが禄剛岬灯台経由で高屋漁港（狼煙漁港ともいう）、この辺りは大規模隆起したところです。最大4m隆起、写真・左からも港が1.5mほど隆起したことが分かります。高屋漁港でこの日、漁から帰られた漁師さんに話を聴くことができました。「先ほど漁から帰ってきた。鯛や鰯を獲って珠洲の尻島港に運んだ。地震で海底、港が隆起して使えなくなった。最近やっと漁が出来て嬉しい」と。高屋港は比較的大きな漁港で、これから今までのように漁業で賑わいそうな雰囲気です。狼煙（のろし）港とも言うので、かつての盛んな漁業も地名からも想像できそうです。高屋港からしばらく行くと、車が何台も止まっている人気スポットがありました。その場所は下窪さんがネットで調べ、ゴジラ岩であることが分かりました。写真右の右奥の岩がゴジラ岩で、かつて干潮時でも岩の周辺は海水に浸かっていたそうです。岩に近づいてみると、かつては海中にあった岩の部分は白っぽくなり、乾燥した海藻がへばりついて、小さな貝が転がっているのが確認できます。この写真の岩々の大半は、かつての海底であったことから、今回の地震のとてつもない大きさを知ることが出来ます。

この後、すず塩田村（塩田村の海岸側は広大な面積で陸地化していました）、白米の千枚田（日本棚田百選人気第一位、棚田の半分が崩壊、今年は少し稲刈りができそうです）、輪島（朝市まつりのイベントをやっていましたが、市街地周辺の漁港の沈下や崩壊したままの家屋もありました）を回って大阪に帰ってきました。珠洲市、半島西岸の漁港、輪島市の大勢の方が震災後も復興に向かって一生懸命に活動されていること知る有意義な二日間の旅でした。

